

「障碍」と語り手の意図：『金閣寺』論

見城, 彩子
九州大学教育学部科目等履修生

<https://doi.org/10.15017/8959>

出版情報：文献探究. 43, pp.39-47, 2005-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

「障碍」と語り手の意図 『金閣寺』論

見城彩子

はじめに

『金閣寺』は、一九五六年一月から十ヶ月間にわたり、雑誌「新潮」に連載された。作者は、当時すでに文壇で注目を集めていた三島由紀夫である。「幼時から父は、私によく、金閣のことを語った。」という書き出しで始まるこの小説は、一九五六年最大の問題作として注目され、これまでも多くの人々によって論じられている。三島由紀夫本人もこの小説について「美といふ固定観念に追ひ詰められた男といふのを、ぼくはあの中で芸術家の象徴みたいなつもりで書いたんですけど……」と、語っており、現行の論文の多くも、三島由紀夫の人生や思想を反映するものとして『金閣寺』を『仮面の告白』と同列にならべ、これを作者のもうひとつの「告白文」としてとらえている。しかし、この小説は、本当に作者の「告白文」として読むべきなのだろうか。

これまでに指摘がされてきたことではあるが、この小説は「私」の手記として書かれている（1）。この小説の語り手は「現在の私」な

のであって、「実在の作者」である三島由紀夫ではない。そして、この三島由紀夫に焦点をあてすぎたことが、これまでの『金閣寺』論の「告白文」的な解釈の原因であったのではないだろうか。そこで今回は「実在の作者」にしばらく読めない読みを行うことで、新たな『金閣寺』論の可能性を探ってゆきたい。

—

様々な問題が取り上げられてきた『金閣寺』であるが、私はまず、この小説の主人公である「私」が、吃りであることに注目したい。この吃りについて、本文中では、「吃りは、いうまでもなく、私と外界とのあいだにひとつの障碍を置いた」と語られている。しかし、「いうまでもなく」という言葉は、あとに（みんな分かっていることだと思っが）という言葉が挿入できるように、自明の事実について述べるときに使う語である。したがって吃りではない読者にとっては、吃りであるということ、「外界とのあいだに障碍が置かれる」ということは、

「いうまでもなく」でつなげられることではない。ではなぜ、あえてここで「いうまでもなく」という語が使っているのだろうか。これについて、

いうまでもなく、という但しがきがついているが、吃りのこうした意味付けは、かならずしも自明のこととはいいがたいかもしれぬ。しかし、小説を正當に理解するためには、この設定を素直に承認しておく必要がある⁽²⁾。

というような言及がある。つまり、「いうまでもなく」というのは、「語り手の私」が『金閣寺』を読み進むうえで理解しておくべき内容を、読者に提示するために使用している語なのである。ここで、「語り手の私」は「いうまでもなく」という有無を言わせなにかたちで、私たち読者と「過去の私」との間に、「冒頭から」「一つの障碍」を置こうとしているのだ。

また、三好行雄の論に、「私」の人間らしさについてふれているものがある⁽³⁾。ここで言う人間らしさとは、多くの偶然の堆積によって培われる人間的成長や、感情のことである。この論文では、小説を成立させるために、「私」から偶然を取り除いた結果、「私」から人間らしさまでもをはぎとることになってしまったと述べられているが、むしろ私は「私」から人間らしさをはぎとることを前提として『金閣寺』すべてが語られているように感じる。

この小説を一読して、この主人公に親しみを抱く読者は稀であろう。どんなに臨場感のある語りがされていようと、それらはすべて現在の「語り手の私」が語っている「過去の私」であり、記録ではなく

記憶であり、また、その語られる内容は「語り手の私」によって取捨選択されたものである⁽⁴⁾。つまり、自分で内容が選択できるのであれば、もっと共感を得られそうなことがらを語ることも可能であったはずなのだ。しかし、「語り手の私」はそれをせず、読者との間に「障碍」を置いて、むしろ自分の異常さを浮き立たせるような語りを行っている。なぜ「語り手の私」は、あえてこのような語りを行ったのか。そこに『金閣寺』でこれまで見落とされてきた問題があるのではないだろうか。私たち読者は、「語り手の私」に導かれることによって、この物語の表の軸である「私」の金閣への異常なまでの執着ぶりを、その特異な生まれつきやそれによる性格によって、あたかも当然のことのように、「いうまでもなく」理解させられ、「私」から人間らしさを見失わされているのである。

二

『金閣寺』という題名からも想像されるように、この小説の中で金閣は、非常に重要な役割をもっている。「私」は小説全体を通して、この金閣に翻弄され続けるが、この金閣と「私」との関係が、読者に「私」の異常さを感じさせる最たるものではないだろうか。「私」の一人称によって語られるこの物語のなかで、金閣はあたかも生命をもっているかのように語られ、次々とその容貌を変化させてゆく。しかし実際の金閣は、何も変化しない、ひとつの歴史的建造物としての「物」である。その「物」である金閣に理解されることを願い、翻弄され続ける「私」は、やはり読者の目には、「一つの障碍」を置いた存在として映るだろう。

しかし、小説中での金閣の変化は、当時の「私」の目をとおしての描写だということをおぼえてはならない。つまり、この金閣の変化はそのまま、「私」の「こころの動きによって引き起こされるのだ。」過去の私」と読者との間に、さらに「障壁」を置く原因になっている金閣の変化を追ってゆくことで、逆に「語り手の私」によってあえて語られていない、当時の「私」の心情を見いだすことができるのである。

それではここから、『金閣寺』の中でも特に、まるで実際に金閣が意思を持っているかのごとく語られる二つの場面について考察してゆきたい。まずは、第五章・第六章における、女と「私」と金閣の場面である。

「私」は第五章で嵐山へ行き、下宿の娘と関係を持つとうとして失敗をする。また、第六章で生け花の師匠と関係を持つとうとして、ここでもまた失敗をする。これらの場面については、ここで「私」が人生（＝女）と関わりたいと思うようになるという論があり、「私」は女とうまく関わる事ができず、そのとき見た金閣の幻影に、女との関係を邪魔し、自分を人生から遠ざけるものとしての憎しみを抱いてゆくとされる⁽⁵⁾。これまでの先行論文では、物語で金閣を主語として進んでゆく「語り」を、当然のごとく受け取ってきた。しかしこの金閣の登場からも、語られていない「私」の心情を見いだすことができる。

これまであまり対等に比較をされることはなかったが、実は、「私」が女との関係をもつことに失敗したのは、これが初めてではない。かつて有為子を夜道で待ち伏せしたときも、失敗しているのである。そのときのことを「私」は、自分が吃りであるがために、言葉に気をとられているうちに失敗してしまっただけとしている。だが、この場面の描

写は下宿の娘との失敗の場面の描写と酷似しているのである。有為子の場面をA、下宿の娘の場面をBとして本文をくらべてみたい。

一 A、そのとき、「私」は自分が石に化してしまったのを感じた。

B、そのとき、金閣があらわれたのである。

二 A、外界は、私の内面とは関わりなく、再び私の周りに確固として存在していた。

B、時にはあれほど私を疎外し、私の外に屹立していた金閣が、今完全に私を包み、その構造の内部に私の位置を許していた。

三 A、曉闇の中にかすかな輪郭をうかべている村の屋根屋根にも、黒い木立にも、目前の有為子にさえも、おそろしいほど完全に意味が欠けていた。

B、下宿の娘は遠く小さく、塵のように飛び去った。

四 A、走り去る有為子が、たびたび嘲って鳴らしているベルの音を私はきいた。

B、物と言わなかったが、その蔑みは、たとえば着物に刺った秋のいのこずちの実のように、万遍なく私の肌を刺していた。

五 A、寝ても覚めても、私は有為子の死をねがった。

B、私の恥の立会人であるあの下宿の娘の死を、明らかに私はねがっていたのだ。

一は、女と関係をもつという行動をしようとしたその瞬間に「私」に起ったことであり、二はそのときの「私」と外界との関係、三はそれ

によつて欲望の対象としての女がどのように変化したのか、四はそれに対する女の反応、五はその後の女に対する「私」の気持ちを表している。これを見ると、どちらの場合も外界と自分の内界とが隔たつてゐることに気が付いた瞬間、女がまったく意味のないものになつてしまつてゐるということが分かる。しかし、なぜ同じような状況下において、Aでの失敗は自分が「石化」してしまつたためであつたと語られ、Bでは金閻が意思をもつて邪魔をしにきたかのように語られるのだろうか。人間が人間であるために必要なもの一つとして自尊心を挙げるとすれば、私は、Bでは「私」が自尊心を守るために金閻を用いることができるようになったのだと考える。

金閻が「私」と女との關係を邪魔する様子が詳しく語られるのは、この箇所と生花の師匠の時の二回だけであるが、この二回の失敗によつて、「私の心は徐々に冷え、無力は立ちまさり、酔い心地は嫌悪感に変わり、何ものへとも知れぬ憎しみがつのり、金閻によつて人生から隔てられたと考えるようになる。そして「私」は「金閻はどうして私を護ろうとする？頼みもしないのに、どうして私を人生から隔てようとする？」と、考えるようになるのである。しかし実際は、「私」は金閻に向かつて一度、自分を人生から護るように祈つていた。この点について、

言葉尻をとらえるわけでは決していないが、頼みもしないのに、と「私」はいつ。だが 彼も一度は、それを金閻に祈つたはずではなかつたか。詮索好きの読者ならば、あるいはここで多少のつまづきや疑問を感じるかもしれない。／勿論、青年の決意を唐突とも矛盾とも感じさせるほど作者は無能ではなかつた。

小説の運びはもつと滑らかである。周到な計算と配慮にみちびかれて、読者はきわめて自然に金閻炎上の破局にさそわれてゆく、というのがおそらく事実だろう。

というように、この矛盾を、読者を金閻炎上まで導くうえで作者のつまずきとしてゐる論もある。しかし、「私」はここで「矛盾」と考へられていることは、実際は「矛盾」ではないと感じるのである。三好行雄の感じた「矛盾」は、「語り手の私」を作者の代理人とみなし、そのことに影響を受けすぎた読みによつておこつたことであろう。

「私」は有為子の事件からわかるように、金閻に邪魔をされる前から、女と関わることはできなかった。さらに過去に失敗した折、有為子に「嘲つて」自転車のベルを鳴らされたことによつて自尊心が傷つけられ、それ以降も女と關係を持つことが怖くなつてしまつたのではないだろうか。また、それは同時に外界と自分の内界との距離を再認識させられることでもあつたのではないかと考える。こうして女と關係をもつことに対して怖れをいだいていた「私」であつたが、自分と同じ身体的な障害者である柏木が、こともなく女と關係を結んでゐるのを目の当たりにして、その理由を「吃り」のせいだけにすることができなくなつたのだ。柏木の行為をそれ以上見せられることに恐怖を感じた「私」は寺へと逃げ帰り、柏木のような人生には大いに惹かれてはいたが、そのような人生から自分を護るように、金閻に対して願つたのである。

そのため、下宿の娘との関わり場面では、「私」を人生から隔てる存在として「吃り」ではなく金閻が登場する。そして、「私」はその金閻を憎むことによつて失敗の責任をすべて金閻のせいにして、充

分の自尊心を護っていたのではないだろうか。また、女との関係を邪魔する金閣について「私」は、「女と私との間、人生と私との間に金閣が立ちあらわれる。すると私の掴もうとして手をふれるものは忍ち灰になり、展望は沙漠と化してしまうのであった」と述べ、金閣によって女の存在が無意味なものになってしまふことを語っている。しかし、二回目の生花の師匠との失敗のときには、まずは生花の師匠の乳房が「次第に無意味な断片に変貌」してから、「ふしぎ」なことに、その乳房が金閣に変貌するのである。これをきっかけに、「私」はさらに金閣を憎むこととなるのだが、この描写から、必ずしも金閣によって女が無意味なものに変貌するのではないということを読み取ることが出来る。そしてそれが自分のせいであることを意識することで自尊心が傷つくことをふせぐために、金閣が即座に立ちあらわれてきていることが、ここから証明されるように思う。つまり、三好行雄は、周到な計算と配慮にみちびかれて、読者はきわめて自然に金閣炎上の破局にさそわれてゆく」としているが、この部分からも「私」の語られなかつた心情を見いだすことができ、ここにあえて「障碍」を置こうとした「語り手の私」の意図が、不自然なものとして浮かび上がってくるのではないだろうか。

三

次に金閣が特に能動的な変化をするのは、第八章以降、特に第十章の実際に「私」が放火を執行するまでの場面である。

寺からの放逐を和尚から示唆され、吃り以外のすべてを失った「私」は、自己の存在意義を見つめ直す旅に出て、「金閣を焼かねば

ならぬ」という使命感を得た。そして、「教育的効果はいちじるしいものがあるだらう」、「金閣が焼けたら、こいつらの世界は変貌し……」、「別謎えの、私特性の、未聞の生がそのときはじまるだらう」といったような、自分の行為によつて全世界が変貌する、いわば世界を底辺でにぎっているような自尊心を、再び手に入れることとなる。

そしてその後、「私」は決行への物質的な準備を進めてゆくのだが、「過去二十年、私に注意を払う人間はいなかつたが、今のところ、その状態はつづいている。今のところ、私はまだ重要ではない。」と、警察署の前を歩きつ戻りつしながら考えるのである。この言葉は、裏返してみれば金閣を焼くということによつて、「私」が世界から注意を払われ重要に思われる人物になることを夢見ていることになる。

また、カルモチンと小刀を買つたのち、六月三十日に「私」は菓子パンを購入するのだが、そのとき「私」が考えているのは、次のようなことである。

いずれ菓子パンは、私の犯罪を人々が無理にも理解しようと試みるとき、格好な手がかりを提供するだらう。人々は言うだらう。『あいつは腹が減っていたのだ。何と人間的なことだらう！』

つまり、実は「過去の私」は、金閣を焼くことによつて世界からその存在を認められ、人間らしさを認められることを一番にのぞんでいたのである。これらのことから、「語り手の私」が語っているような、金閣を焼いてその束縛から逃れることが、「過去の私」の本当の望みではなかつたということが確認される。

そして、いよいよ金閣に放火することを実行に移すとき、「私」は

一時間も闇の中にすわりながら「生まれてから、このときほど幸福だったことはなかった」と、感じるのにもかかわらず、あと燐寸で火をつけるだけというところまできて、激甚の疲労に襲われるのである。このとき、「私」は

その美しさは儂いがなかった。そして私の甚だしい疲労がどこから来たかを私は知っていた。美が最後の機会に又もやその力を揮って、かつて何度となく私を襲った無力感で私を縛ろうとしているのである。

と、その疲労について語っている。しかし、これまで確認してきた方向性で読み進むならば、この場合もまた、金閨が立ち現れてくる背景には、何らかの「私」の心情があったのだということになる。なぜ、ここで金閨を用いる必要があったのか。それは、「行為はすべて夢見られた」つまり、夢は夢にたどり着くまでが一番幸せな時期であり、その夢が叶えられてしまえば、自分には何も残らないことが、無意識のうちに分かっていたからではないだろうか。しかし、そのことが「語り手の私」から直接語られることはない。

四

ここまで、「過去の私」の隠された心情を明らかにすることで、「語り手の私」が、「過去の私」からあえて人間らしさをひきはがし、外界（＝読者）との間に「障壁」を置いた形で『金閨寺』を語ってたということを確認してきた。そして、私はこの問題の解決の糸口として、

最終文が

別のポケットの煙草が手に触れた。私は煙草を喫んだ。一ト仕事を終えて一服している人がよくそう思うように、生きようと思は思った。

という形で結んであることに注目したい。この最終文には、様々な論がある。

これまでの「暗黒の世界」から離脱し、新しい世界の入り口に立つて、生命の意欲を感じながら、自然な形で「生きよう」と私は思ったのである。この意欲は、ことさらに構えて意識したところに生じたものではない。自然に、ごく自然に「一ト仕事を終えて一服している人がよくそう思うように、生きよう」と思うのである。（竹原崇雄）

さらにこの小説の構造の要は末尾の結語「一ト仕事を終えて一服している人がよくそう思うように、生きよう」と私は思ったのである。この言葉を最後に語り手は沈黙する。ところが、すでに「行為者」としての使命を終わった「私」が、これから「生きよう」とは、一体何のためにか？いうまでもなくそれは行為の意味を語るためにほかならず、彼は「語り手」として再生し、ふたたび冒頭にもどって、この物語が語られはじめる筈なのである。

（田中美代子）

まず、竹原崇雄のように、「私」が金閣を焼いたことにより生命の意欲を持った新しい出発をする、とする論である。しかし、これについて私が挙げたいのは、「私は遁れた獣のようにその傷口を舐めた」という描写である。『金閣寺』のなかで動物や動物的なものは、「私」にとつてのマイナスのイメージで比喻に使われている。つまり、ここでも「私」は自分の今の状況を良いものだとは思っていないのではないだろうか。また、田中美代子の言う、語りの循環性に着目した言及は卓見であると思うが、それにしてもなぜこの文章がそこに起用されたかは、まだ考察する余地があるに違いない。

『金閣寺』において、煙草が登場するのは、次の場面である。

- ・ 米兵が、女の腹を踏んだ礼として渡すもの。
- ・ ふくぶくしい老師が好きなもの。
- ・ 敦賀行き汽車の中、愛されにくい生者が吹かすもの。
- ・ 少し貧しいただの学生がすうもの。

つまり、すべて「私」が属すると考えていた死者の、暗闇ではあるが何らかの使命をもっているとした世界ではなく、世俗的な人々、または一般的な人々が吸うものとして描かれているのである。この場面に至るまで、「私」が煙草を吸っている描写は一度も描かれていない。つまり、「私」はこの煙草を吸うことで、自分が凡庸な人間に仲間入りしたことを示しているのではないだろうか。

金閣を焼いて、夢は最後まで実現されたが、それによって世界が変わるといった劇的な変革はおこらなかった。結局、金閣はひとつの物質としての物であり、世界を変革する力など、持つてはいなかった。

そこに残ったのは、老師からも誰からも見捨てられた「私」だけである。これまで「私」を支えていた「使命感」も「自尊心」もすべてをなくし、からっぽになった「私」は、今度は平凡な人間として、それでも「生きよう」と思う。そして、「金閣を燃やす」という大きな「使命感」があつた幸せなころをなつかしく思って、そのために冒険にもどつてまた語り始めるのではないだろうか。夢を実現してしまつた現在の「私」は、昔の幸せだつた頃を語ることが自分の存在意義になつた。本文中で、ことさら「私」から人間らしさがはぎとられた語りになされるのも、「他人から理解されないことが矜り」であつた当時の「私」は他人とは違う、特別な存在であつたことを強調したかつたからではないかと考える。そして、この物語を語っているのは、「特別な吃りの私」を語ることでしか自分を支え得ない、「平凡な吃りの私」なのである。

おわりに

今回は、「作者にしばられない読みをする」ことで、『金閣寺』の新たな読みの可能性を探ることを目標として、この論文をすすめてきた。

『金閣寺』は、「他人から理解されないことが矜り」であつたころの「私」をなつかしく思う「私」が語る物語であつた。そのため、以前の自分は平凡な人間ではなかつたということを強調するために、「私」は故意に外界（＝読者）と「ひとつの障碍」を置いた形で語られる。しかしその陰には、「吃り」のために周囲から笑われる孤独な「私」

の姿と、全ての夢を実現してからっぽになった現在の「語り手の私」の姿が浮かびあがってくるように思えるのである。

ところで今回、そのような読みに挑戦する中で感じたことであるが、この『金閣寺』は、芥川龍之介の『芋粥』に似ていると思う。『芋粥』は、笑われ者の五位という男が、芋粥をおなか一杯食べるということに対する異常な執着だけを支えに生きていたが、それが叶えられることによってその人生を貫いていた欲望をなくし、昔の夢を叶える前の幸福な自分をなつかしく思う、という話である。

この二つの話を比べてみると、五位の「嘲笑される」立場や、それに対する補償としての欲望、そしてその夢が目の前に差し出されると「これを、目のあたりに見た彼が、今、提に入れた芋粥に對した時、まだ、口をつけない中から、既に、満腹を感じ」ところなど、実に似ていると感じる。また、そうして一生を貫いていた欲望を実現した五位は、「芋粥を飲んでゐる狐を眺めながら、此處へ来ない前の彼自身を、なつかしく、心の中で振り返った。『中略』芋粥に飽きたいと云ふ欲望を、一人大事に守つてゐた、幸福な彼である」と感じていると描かれている。

『芋粥』が「私」の人間性を語りによってコントロールしなかった場合の『金閣寺』に良く似ているとみれば、この『芋粥』のように、『金閣寺』の最後の文章を、欲望（使命感）を持っていた昔をなつかしんでいるとする読みは、方向性として自然であると言えるだろう。この、二つの物語については、もう少し詳しく比較、検討してみると、また新たなものが見えてくるのかもしれないが、それは今後の課題としたい。

注

(1) (4) 杉本和弘「私」手記という方法―『金閣寺』の場合―（『名古屋近代文学研究』(8)平2・12）・有元伸子「『金閣寺』の一人称告白体」（『近代文学試論』(27)平元・12）・北野純子「最終文に収斂される告白―『金閣寺』論」（『国文学論考』(35)平11・3）において、『金閣寺』の語り手についての言及がある。

また、杉本和弘が注の中で「私」自身が、意図的、選択的記述であることを表明している箇所もある」として、

「今まで、故意に母について、筆を省いて来たのには理由がある。母のことにはあまり振れたくない気持があるからだ」（三章）

という部分を挙げている。これについて、『金閣寺』中に名前を伴って登場する人物が、その作品中において何回名前が語られるかを、実際に数えてみたところ、父「45(36)」・母「76」・老師「258」・鶴川「68(30)」・柏木「190」・禅海「20」となった。（注①ここでは「私」によって語られている名前の数に注目したかったので、会話文における「私」以外の人物の発言に出てくる名前については、数に含めなかった。②思い出の中にだけ登場する有為子・倉井は対象としない。③肉親である父と母も例外的に対象とした。④括弧内の数は、その登場人物が死んだ後に語られる回数である。）

「わざと筆を省いてきた」とされる母簿描写であるが、特に第二章までの名前の出現回数は、わずかに四回である。この時期には「私」の幼い頃からの様子、そしてその間には父の葬儀の様子までもが含まれる。このような内容の場面において、もう一方の親である父が55「45(10)」回も語られているのに対して、母の名前の登場回数は明らかに少なすぎると考えられ、たしかに「私」が「わざと」筆を省いてきたことと読み取ることができ、実際に「私」

が意図的、選択的に『金閣寺』を語っていることが確認される。

また、これ以降もほかの登場人物にくらべて、まだ生きているにもかかわらず、極力母についての記述が省かれており、その登場場面では必ず「野心」の提示がされているところにも注目をしたい。

- (2) (3) (6) 三好行雄 『金閣寺』について―其の構造(『日本文学』6-3) 昭32・2)

- (5) 三枝康高 『金閣寺』の作品分析(『日本文学』20-3) 昭46・3・田坂昴

「金閣寺」―美、悪、虚無と人生(『増補三島由紀夫論』昭45・8 風濤社)

・佐藤秀明 『金閣寺』観念構造の崩壊(『椋山国文学』19) 平7・7・有元

伸子「三島由紀夫『金閣寺』論―(私)の自己実現への過程―」(『国文学攷』

(114) 昭60・6) などがある。

- (7) 第一章での海軍貴官学校での挿話では、先輩の短剣に傷をつけることと共にもに、「私」が周囲の人間からどのように接されていたのかが語られ、このとき「私」は、「吃り」のために周囲の少年たちからは馬鹿にされ、笑われる存在として描かれる。「笑う(嘲笑する)」という行為は、だいたいにおいて、上の者が目下のものを見下しておこなうものである。ここで言う上の者というのは、地位的な強者である場合もあれば、精神的な優越者である場合もある。この場合は、嘲笑した人物は同級の少年たちであるので、彼らは「私」に対する精神的優越者と見るべきであろう。この「笑われる」存在であった「私」は、自尊心を守る補償として「やがては、五月の花も、征服も、意地悪な旧友たちも、私のひろげている手の中へはいって来る」、「自分が世界を、底辺で引きしぼって、つかまえている」という自覚を、僧籍にある自分にもつようになる。戦争中、人々が死と隣り合わせの人生を送っていたとき、海軍機関学校の先輩の「あと何年かで、俺も貴様の厄介になるわけだな」という言葉からも読み取れるように、僧侶は自分の死後をもとめてくれる人

として、もつと敬われる存在であった。

しかし、敗戦によって人々のまわりから死の影が消えると、「私」は次第にきらびやかさを増してゆく世間に取り残されるような感覚を味わうのである。

第三章で、「私」は終戦後に米兵から僧衣を引っ張って笑われている。このときの笑いは嘲笑とはまた別種のものであると思うが、馬鹿にした笑いであることは確かである。つまり、過去に同級の少年たちに嘲笑されることから自分の自尊心を守ることとなった「僧になる」という認識が、ここで僧衣を笑う、僧である自分を「笑われる」ことによって、崩壊しかける状況に陥るのである。

- (8) 竹原崇雄 『三島由紀夫金閣寺の世界』(平12・2 風間書房)

- (9) 田中美代子 「美の変質―「金閣寺」論序説」(『新潮』昭55・12)

(けんじよう あやこ・九州大学教育学部科目等履修生)

(平成十六年三月文学部卒業)